

早期教育と子どもの発達について考える

——本学学生とその母親への習い事についての回想調査に基づいて——

成 田 朋 子

I はじめに

総じて、現代の子どもは忙しいと言える。中学生・高校生達が「忙しい」と感じ、「時間があったらゆっくり休みたい」と思うだけでなく、小学生からも同様の答えが返ってくる時代である。テレビ、テレビゲームに割く時間は一向に減らず、加えて学校以外で行われる教育もますます盛んになり、学習塾に通う子どもの比率は年々増加し、その他に、どの子どもも必ずと言ってよい位、1つや2つの習い事に通っている時代である。そしてこの傾向は、今日幼児をも巻き込みつつあると言える^(註1)。

かつて筆者が関与した調査^(註2)においても、4、5歳の子どもの約3分の1の子ども達が1日に費やすテレビ視聴時間は2～3時間で、中には4時間以上見る子どももあり、休日にはさらに増える、おけいこごと、4歳の子どもの約4割、5歳の子どもの約6割が週1日ないし週2～3日何らかのおけいこごとに通っている、中には4日以上通っている子どももいる、という結果であった。

一般におけいこごとと言われるものには、ピアノ、絵画、習字、算盤、スイミング、体操、など様々なものがあるが、時代とともにその種類も増え、また始める年齢も徐々に早くなっているようである。このような風潮の中で、知的な教育を幼児期から受けさせようとする風潮も生まれ、これらは早期教育という言葉で総称されている。早期教育における低年齢化に歯止めがかかることはなく、今日では超早期教育という言葉まで生まれているほどである。これらの風潮に対して、心身ともに調和的に全面的に発達すべき段階に様々な教育をすることの弊害を警告する研究者もいるが、継続的な発達調査によるデータがあまりないことなどから、早期教育がますます盛んになっているのが現状であろう。

筆者自身も、現在世の中で行われている低年齢からの教育をすべて全面的に否定するつもりはないが、一部の母親が、当座のできた、できないといった表面的な達成に目を奪わ

れて、子どもを駆り立てていると見受けられる状況を憂慮せざるをえない。年齢の低い段階で特別の教育を施すことはどのような効果なり影響があるのだろうか、また子どもの発達にとって一体どのような意味があるのだろうか。輕輕に結論を出すのではなく、慎重に考える必要があると思われる。

子どもは生まれつき、否、生まれる前から主体性をもった存在である。この子ども自身の内に秘められた発達する力を無視した教育は、決してその後の望ましい発達をもたらさないであろう。子どもの望ましい発達を支えるべきまわりの大人は、子どもの発達には一定の順序があり、これを無視した教育を行おうとしてはならないこと、また、発達段階にはそれぞれの段階で育てるべき大切なことがらがあり、その時期にじっくり時間をかけて、存分に育てなければならないことを心して子どもにかかわることが大切なのである^(註3)。人生の早期に施された教育がその後の発達にとって意義あるものであってほしいものである。

筆者は以前、乳児期および幼児期のごく初期にベビースイミングスクールを経験した親子についてアンケート調査を行い、ベビースイミングスクールの経験は、直接子ども自身の成長に寄与する側面と、環境要因の1つである母親の養育態度・育児態度を介して間接的に子どもの発達に寄与する側面があることを示唆した。アンケート項目の中にベビースイミングに参加してよかったかどうかという項目を設定したのであるが、それに対する回答は親子とも概ね肯定的なものであった^(註4)。

幼児期の体験は、後で振り返ってみて、やってよかったと思えるような経験であることが望ましいが、ベビースイミングスクールは今日盛んになりつつあるとはいえ、まだその他のおけいごととほど一般化されているとはいえないだろう。一般的に行われているおけいごとや教育において、それを経験した親子は後々、かつての経験をどのように受け止めているのであろうか。本稿では、一般的に行われているおけいごとや習い事について調査することにより、人生の早い時期から何かを経験することの意味、その後の発達に及ぼすであろう影響を探ってみたいと思う。

さてここで、「おけいごと」という言葉についてふれておくことにしよう。

金崎 (1986)^(註5)は、「けいごとは、『古^{イニシ}ヘノ事ヲ^{カンガ}稽フルコト』で古くは古書を読んで学問することの意味であった。しかし、これまで一般には、けいごとは茶の湯や生け花やピアノなどの芸事を習うことと理解されてきた。そのけいごとも最近では芸事に限定せず、英語や水泳などの語学やスポーツをも含むなど、広く『習い事』全般を意味するようになってきている。」と述べている。そして、「学習やスポーツなども含む場合にこれを『習い事』とし、いわゆる音楽や美術や書道などの技芸に関するものについては『けいごと』として」区別している。

本稿では、金崎の立場に習い、幼稚園・保育所・学校で行われる教育課程外のもので特定の指導者に習っているものすべてを念頭に置き、「習い事」ということばを使って調査することにしたいと思う。

Ⅱ アンケート調査の方法

1997年6月、本学1年次「発達心理学Ⅰ」の授業時に資料1（51頁参照）のアンケート用紙を配布し、記入させ回収した。

アンケートは、子どもの頃に経験した習い事の種類、その習い事を始めたきっかけ（もしくは目的）、習い事をしてよかったかどうか、現在の自分にプラスになっているかどうか、早期教育についてどう思うか、などにより構成されている。

そして、アンケート回収時に資料2（52頁参照）のアンケート用紙を持ち帰らせ、保護者に記入してもらい、次の週の授業時に提出するよう指示した。保護者からのアンケートはすべて母親の記入によるものであった。

資料の整理にあたっては、本人と保護者の回答が揃っているもののみを採用した。その結果、「発達心理学Ⅰ」受講学生162名の内118名（72.8%）分を考察の対象にした。

Ⅲ アンケートの結果と考察

（1）全体の傾向

まず118名の全体的な傾向をみてみよう。

① 習い事の種類と期間

習い事を何もしなかった者は118名中1名のみである。残り117名については、1種類のみの習い事をあげた者は少なく、1人でいくつかの習い事をしていた様子がうかがえる。

習い事を何種類していたかの分布を表1に示す。習い事を何もしなかった者から6種類の習い事をした者までに分かれる。3種類あげた者が42名（35.6%）で一番多く、4種類あげた者が31名（26.3%）で、それに続いている。以下2種類、1種類の順である。平均3.12種類の習い事を経験していたことになる。

具体的にどのような習い事をしていたかを表2に示す。

一番多いのが「ピアノ」で、118名中94名（79.7%）にものぼる。次が「習字・書道」

表 1 経験した習い事の種類

種 類	0	1	2	3	4	5	6	計
人 数 (人)	1	10	22	42	31	8	4	118
パーセント (%)	0.9	8.5	18.6	35.6	26.3	6.8	3.4	100

表 2 習い事の種類と人数

数	ピアノ	習字・書道	算盤・珠算	スイミング・水泳	エレクトーン	英語・英会話	絵・図工	公 文
人 数 (人)	94	86	59	52	17	17	8	8
パーセント (%)	79.7	72.9	50.0	44.1	14.4	14.4	6.8	6.8

表 3 習っていた期間

	始めた時期	止めた時期	今も続けている者の人数 (割合)
ピアノ	5 歳 8 か月	12 歳 8 か月	39 (41.5%)
エレクトーン	6 歳 1 か月	11 歳 1 か月	2 (11.8%)
スイミング	6 歳 4 か月	10 歳 7 か月	0
習字	6 歳 9 か月	12 歳 5 か月	9 (11.5%)
絵・図工	6 歳 10 か月	10 歳 3 か月	0
英語・英会話	7 歳 10 か月	13 歳 2 か月	2 (11.8%)
算盤	8 歳 5 か月	11 歳 9 か月	0

で 86 名 (72.9%)、3 番目が「算盤・珠算」で 59 名 (50.0%)、4 番目が「スイミング・水泳教室」で 52 名 (44.1%)、5 番目が「エレクトーン (音楽教室も含む)」及び「英語 (もしくは英会話)」の 17 名 (14.4%) ずつである。以下「絵 (あるいは絵画、図工)」(8 名)、「公文」(8 名)、「バレエ (ダンスも含む)」(6 名)、「体操教室」(5 名) があげられ、2 名ないし 1 名があげているものには「リトミック」、「声楽 (歌)」、「フルート」、「クラリネット」、「詩吟」、「バトン」、「剣道」、「テニス」などがある。

次に、多くの者があげた習い事について、習っていた期間をみてみよう。結果を表 3 に示す。

始めた時期については、全員の平均を示した。止めた時期については、今現在も続けている者もかなりいるので、続けている者以外の者の平均を示し、今現在も続けている者の割合も表に示した。

表 3 から、5 歳半ば過ぎから何らかの習い事を始め、小学校中学年頃にはいくつかの習い事をし、現在まで続けている者以外は中学校卒業頃には止めるというのが平均的な姿であることがわかる。ピアノの場合、今も続けている人数の割合が他に比べて非常に高い。習い事としてピアノが多いのは様々な調査にもみられるところであるが、現在まで続いて

いたり、高校時代から始めた者がかなりいることは、調査対象が保育科学生であることからくるものと思われる。

② 習い事を始めたきっかけ（もしくは目的）

習い事を始めたきっかけ（もしくは目的）が何であったのか、子ども（学生本人）と保護者（Ⅱで述べたように、アンケートに回答した保護者全員が母親であったので、以下母親と表記する）の結果を対比させて表4-①②に示す。

学生の側からは「自分の意志で始めた」とする者が73名（62.4%）で一番多く、次に「兄弟や友達が通っていたから」の55名（46.6%）、「親に勧められて」の46名（39.3%）が続き、「新しい友達が欲しかったから」と回答した者はいなかった。その他については「気が付いたら始めていた」3名、「覚えていない」2名の他、「無理やり入らされた」「喘息のため」「体が弱かった」「親戚や近所のお姉さんに憧れて」などであった。

母親の側からは、「子どもが習いたいと言ったから」が64名（54.7%）で一番多いが、それとほぼ同じ割合の62名（53.0%）

が「何かを身につけてほしいと思ったから」をあげている。「何かを身につけてほしいと思ったから」の人数と「将来活かしてほしいと思ったから」の17名を合計すると89名（76.1%）になり、「友達作り」13名（11.1%）や「兄弟や友達に通っていた」14名（12.0%）を大きく引き離している。その他については、「精神力をつけるため」「健康対策のため」「体力づくり」「感受性豊かな子に育ててほしいと思った」「水に顔が浸けられるように」「音楽のある楽しい家庭」「自分に自信をもっていてほしかった」「趣味として大人になっても何か楽しみがあるとよいから」「一つの目標に向かって一生懸命やる姿勢作り」など、「身につけてほしいこと」についての具体的な文言が並べられていた。一般的には「子どもが習いたいと言ったから始めさせること

表4 習い事を始めたきっかけ（目的）

① 学生の回答

	人数（割合）
自分の意志で始めたいと思ったから	73 (62.4%)
兄弟や友達に通っていたから	55 (47.0%)
新しい友達が欲しかったから	0
親など大人に勧められて	46 (39.3%)
その他	13 (11.1%)

② 母親の回答

	人数（割合）
子どもが習いたいと言ったから	64 (54.7%)
兄弟や友達に通っていたから	14 (12.0%)
友達作りのため	13 (11.1%)
何かを身につけてほしいと思ったから	62 (53.0%)
将来活かしてほしいと思ったから	17 (14.5%)
その他	6 (5.1%)

③ 親子の一致の程度

	人数（割合）
一致郡	87 (74.4%)
不一致郡	30 (25.6%)

にした」と答える親が多いといわれるが、これらは、ただ子どもが習いたいと言ったというだけでなく、母親として子どもに対する期待や夢があったことを示唆する文言といえるだろう。

なお、習い事を全くしなかった学生理由は「したくなかった」であり、母親の方の理由は「近所の同年の子どもが何もしなかったから」であった。

ここで、子どものあげたきっかけと親のあげた目的を照合してみよう。例えば、子どもが「自分の意志で始めた」と回答し、母親が「子どもが習いたいと言ったから」と回答している場合や、子どもが「親に勧められて」と回答し、母親が「何かを身につけてほしいと思ったから」「将来活かしてほしいと思ったから」と回答している場合などは、習い事に対する親と子の気持ちがほぼ一致していたと仮定することにしよう。逆に、子どもが「親に勧められて」と回答しているのに対して、親が「子どもが習いたいと言ったから」と回答している場合は、習い事に対する親と子の気持ちにずれがあったと仮定できるだろう。習い事をしていた 117 組の内 87 組 (74.4%) で親子の気持ちは一致し、30 組 (25.6%) で不一致であった (表 4 - ③)。この親子の気持ちのずれは習い事を続ける過程に微妙に影響を及ぼしたのではないだろうか。

③ 「習い事をして (させて) よかったかどうか」について (表 5 参照)

習い事をしてよかったかどうかの問に対しては、習い事を経験した学生 117 名中 109 名 (93.2%) が「よかった」と回答している。

その理由としては、「役立っている」「将来に活かせる」が 37 名 (「よかった」と答えた者 109 名の 33.9%にあたる)、「(知識・技術が) 身についた」「できるようになった」「上手になった」が 26 名 (23.9%)、「友達ができた」21 名 (19.3%)、「特技になった」「得意なものができた」「趣味がもてた」が 12 名 (11.0%)、「楽しかった」「楽しさがわかった」が 10 名 (9.2%)、以下「自分のためになる」「自信ができた」「自分に合うものを見つけた」などが続く。

一方、母親については、習い事をさせてよかったかどうかの問に対して 117 名中 114 名 (97.4%) が「よかった」と回答している。

その理由としては、25 名 (「よかった」と回答した者 114 名の 21.9%にあたる) が「役立っている」、11 名 (9.6%) が「今も続いている」「続けることの大切さがわかった」をあげて

表 5 「習い事をしてよかったかどうか」
「プラスになっているか」に対する回答

	学生の回答 人数 (割合)	母親の回答 人数 (割合)
よかった	109 (93.2%)	114 (97.4%)
プラスになっている	114 (97.4%)	111 (94.9%)

いる。その他、「友達ができた」（9名）、「技術・正しいやり方が身についた、上手になった」（8名）、「自信ができた」（5名）、「忍耐力がついた」「根気ができた」「趣味ができた」（それぞれ4名）、「楽しめる」「集中力がついた」（それぞれ3名）があげられており、「自分自身が楽しかった」と述べている母親も2名いる。

④ 習い事が今の自分(子ども)にプラスになっているかどうかについて（表5参照）

現在の自分にプラスになっているかどうかについては、習い事を経験した117名中114名（97.4%）が「プラスになっている」と答えている。

理由は、37名（「プラスになっている」と答えた者114の32.5%にあたる）が「役立っている」、10名（8.8%）が「ピアノのレッスン・音楽の授業にプラス」と答えている。「一度経験したことはやり易い」「上手になった・できるようになった」を6名ずつが、「保母という夢にプラス」「保母に必要」を4名ずつが、「友達ができた」「体力がついた」を3名ずつがあげている。保育科のカリキュラムであるピアノのレッスンが学生達の心の中でかなりのウェイトを占めており、現在の自分にプラスになっているかどうかの判断の基準になっていることがうかがえる数値であろう。

母親の側では、習い事をさせた117名中111名（94.9%）が「プラスになっている」と答えている。

その理由は、「今役立っている」「将来の仕事に役立つ（必要）」を18名（「プラスになっている」と答えた者111名の16.2%にあたる）ずつが、「職業（進路）選択に結び付いた」「何らかのプラス」を7名ずつが、「楽しくやっている」「体力がついた・健康にプラス」を4名ずつが、「上手になった」「自信がついた」を3名ずつがあげている。

ここで、習い事をしてよかったと思う人数が学生より母親の方でやや多く、プラスになっていると思う人数は母親より学生の方でやや多くなっていることは興味をひく傾向である。

⑤ 子どもの頃に始めておけばよかった（始めさせておけばよかった）と思う習い事について

学生が子どもの頃に始めておけばよかったと思う習い事として、5名以上の者があげているものとして、24名（20.3%）がピアノを、22名（18.6%）がバレエを、19名（16.1%）がスイミングを、12名（10.2%）が習字を、11名（9.3%）が英会話をあげている。

その理由は、「下手だから」「上手になりたい」「苦労している」「憧れ」などである。因に、ピアノの24名は子ども時代にピアノを習わなかった学生の全てである。また、習い事を何もしなかった学生も、子どもの頃に始めておけばよかったと思う習い事として、「今大変だから」という理由でピアノをあげている。

母親が子どもに習わせておけばよかったと思う習い事は、やはりピアノで、18 名 (15.3%) と一番多くあげられている。以下英語 8 名 (6.8%)、スイミング 6 名 (5.1%)、習字 6 名 (5.1%) である。理由については、「今苦労している」「進路がわかっていればやらせた」などであったが、無記入の者も多かった。なお、習い事を何もさせなかった母親も、「小さい頃の方が覚えが良いから」という理由でやはりピアノをあげている。

⑥ 胎児期から教育を始めるような早期教育熱の高まりについて (表 6 参照)

自由記述形式で、胎児期から教育を始めるような現象についての意見を探ることにした。学生達の半数以上の 62 名 (52.5%) が「反対」、半数弱の 54 名 (45.8%) が「どちらとも言えない」と答え、「賛成」はわずか 2 名 (1.7%) のみであった。

「賛成」と答えた学生の理由は、「愛する気持ちが高まる」と「ほどほどなら良い」という条件付きのものであった。「反対」と答えた学生達の理由としては、「子どもらしく自由に遊ぶのが一番」「子どもの意志が大事で大人の管理はよくない」「年齢に合った教育だけで十分、他に学ぶべき大事なことがあるはず」「親のエゴに過ぎない」などが主なものであった。「どちらとも言えない」学生達の理由は「子どものことを思う気持ちは大切だが、行き過ぎて突っ走るのはよくない」「子どもは自然に育てるのが一番だ」と思う一方、自分が子どもの頃習い事をして、とてもよかったと思うから」などの記述にみられるように、プラス面とマイナス面両方が考えられ、賛成・反応どちらとも判断しにくいというものの他、多くは、「賛成」「反対」の学生があげた理由と同様の理由があげられていた。

一方、母親達の意見は、母親達の 29 名 (24.6%) が「反対」、85 名 (72.0%) が「どちらとも言えない」、4 名 (3.4%) が「賛成」であった。

「反対」の理由は、「やりたい時にやらせたい」「中途半端」などであり、「賛成」の理由は「親子とも良い環境にあるのは幸せ」「母親の心の持ち方で子どもは変わる」「精神的安定にプラス」「才能開発に役立つ」などであり、「どちらとも言えない」の理由は、「人それぞれの考えがある」「母親の心が穏やかになることが大事」「度を過ぎると逆効果」「子どもの興味なら」「将来幸せになれるのだろうか」などであった。「どちらとも言えない」と答えた母親の約半数は無回答であった。

表 6 早期教育熱の高まりについての意見

	学生の回答 人数 (割合)	母親の回答 人数 (割合)
賛 成	2 (1.7%)	4 (3.4%)
どちらともいえない	54 (45.8%)	85 (72.0%)
反 対	62 (52.5%)	29 (24.6%)

以上の結果から、調査の対象になった学生と母親達の平均的な姿をまとめると以下になるだろう。

兄弟や友達の影響もあって、子ども

自身が始めたいと思い、母親も子どもの気持ちを汲み取り、また何よりも子どもに対する期待や夢があって何らかの習い事を始めることになった。小学校から中学校時代にかけて3種類位の習い事をし、現在続けている者もいる。子ども時代の習い事を振り返ってみて、親子とも習い事をして良かったと思っており、また現在にプラスになっていると考えている。それは、「役に立っているから」である。また、子どもの頃に始めておけばよかったと思う習い事として、親子とも多くの者がピアノをあげている。そして、現代の行き過ぎた早期教育については、多くの者が「反対」もしくは「どちらとも言えない」と回答しているが、はっきり「反対」と回答した者は、母親に比べて学生の方に多かった。

（2）以前の経験を肯定的にとらえていないケースについて

次に、かつて経験した（経験させた）習い事をして（させて）よかったと思えない、プラスになったと思えないケースについて考察を加えたいと思う。

親子のどちらかあるいは親子の両方が「よかったと思えない」「プラスになったと思えない」「よかったのかプラスになっているのか疑問である」と感じている12のケースについてであるが、これを3つのグループに分けて考察したいと思う。

1つ目のグループは、母親は「よかった、プラスになっている」と思っているのに対して、子どもの側では「よかったと思えない」「プラスになったと思えない」「よかったのかプラスになっているのか疑問である」と感じている6ケース、2つ目は、逆に子どもの方では肯定しているのに、母親の方で否定もしくは疑問を持っている4ケース、3つ目は、親子とも否定もしくは疑問を抱いている2ケースである。

① 子どもの側が否定的な6ケースについて

表7、表8-①②に示したように、このグループの学生達は、調査対象全体の平均3.1種類に比べてやや多い平均4.7種類の習い事を、3歳8か月から始め、13歳8か月で止めている。

習い事を始めたきっかけは、子どもの方では、6名中4名が「自分から」をあげているが、それよりも多い5名が「親に勧められて」をあげている。親の方でも全員が「何か身につけてほしいと思ったから」をあげている。表4と比べて「親にすすめられて」「何か身につけてほしいと思ったから」が多いことが特徴的である。

習い事に対して懐疑的な感じを抱いている理由として、3名が「友達と遊ぶ時間がなかった」と述べている。半数の母親は「友達作り」も目的の一つにあげているにもかかわらずである。さらに「無理やり入らされた」、「親の楽しみでやっていたけれど、どれも本格的に身につけていない。でも親は楽しんでいた。」という記述もみられた。

一方母親の中には、肯定してはいるものの、「本人はどう思っているかわからないが、親としてはプラスになったと思いたい。」と述べている母親もいた。

② 母親の方が懐疑的な 4 ケースについて（表 7、表 8－①②参照）

平均 2.5 種類の習い事を 7 歳 0 か月から始め、12 歳 9 か月で止めている。

調査対象全体に比べて、少ない種類の習い事を、あまり早くから始めていないグループである。そして、4 名とも「自分から」言い出して始めたのではない。しかし子どもの側では「友達ができた」や「楽しい思い出になっている」と述べ、習い事をしたことを肯定

表 7 習い事に否定的なグループの傾向

	学生が否定的	母親が否定的	親子とも否定的	12 ケース全体
習い事の数	4.7	2.5	2.5	3.6
始めた年齢	3 歳 8 か月	7 歳 0 か月	4 歳 6 か月	4 歳 11 か月
止めた年齢	13 歳 8 か月	12 歳 9 か月	11 歳 0 か月	12 歳 11 か月

表 8 否定的なグループが習い事を始めたきっかけ（目的）

① 学生の回答

	学生が否定的	母親が否定的	親子とも否定的	計（人数と割合）
自分の意志で始めたいと思ったから	4			4 (33.3%)
兄弟や友達が通っていたから	2	3	1	6 (50.0%)
新しい友達が欲しかったから				0
親など大人に勧められて	5	2		8 (66.7%)
その他				

② 母親の回答

	学生が否定的	母親が否定的	親子とも否定的	計（人数と割合）
子どもが習いたいといったから	2	2	1	5 (41.7%)
友達作りのため	3		1	4 (33.3%)
兄弟や友達に通っていたから	1			1 (8.3%)
何かを身につけてほしいと思ったから	6	3	1	10 (83.3%)
将来活かしてほしいと思ったから	2			2 (16.7%)
その他				

③ 親子の一致の程度

	人数（割合）
一致 郡	8 (66.7%)
不一致 郡	4 (33.3%)

し、プラスになったと思っている。

もともと母親が習い事に対して消極的で、小学校入学頃までは何も習わせないでいたのであろうか。ところが、プラスになっていないと答えた母親の一人が「よかったかどうかに対しては、どちらとも言えないが、習い事をした時間を否定したことになるからよかった」と答えているように、母親達は、あまり役に立っているとは思えないものの、習い事をさせたことを否定したくはないという、アンビバレントで複雑な感情をもっているようである。

③ 子どもも母親も懐疑的な2ケースについて（表7、8-①②参照）

1ケースは、子どもの側のきっかけは不明であるが、母親は何かを身につけさせたいと思い、4歳から12歳までピアノだけを習わせている。もう1ケースは、兄弟や友達が通っていたことにより、5歳から4種類の習い事を経験している。母親は子どもが習いたいと言ったためと、友達づくりのために習わせたのである。

ところが2名の学生とも「いやになった、きらいになった」と述べている。

母親の一人は「役に立っていない」と述べ、他の1名は「（4種類の習い事すべてを）2年位で止めており、もう少し続けていればよかった」と答えている。もう少し続けていれば、興味が出てくることも十分考えられようが、このケースの場合、親子とも習い事に対する積極性はあまり感じられないことから、より拒否的になる危険性もあり、単純に考えることはできないだろう。

④ 習い事を始めたきっかけにみられる親子のずれ

以上、それぞれのグループ毎に考察してきたが、習い事を始めたきっかけ（目的）について、さらに12ケースの全体の傾向を量的にみてみよう（表8-①②）。

学生の側で「自分の意志で始めた」とする者は4名（27.8%）、「親に勧められて」始めた者は6名（50.0%）、母親の側で「子どもが習いたいと言ったから」と回答した者は5名（41.7%）、「何かを身につけてほしいと思ったから」「将来活かしてほしいと思ったから」と回答した者は合計12名（100.0%）であった。これらの数値を表4-①②の全体の数値と比較すると、習い事の経験を肯定的にとらえていない12ケースでは、習い事を始めるのを左右するのは子どもの意志より母親の意向であったと言える。

また、習い事に対する親と子の気持ちの一致度をみると（表8-③）、8組（66.7%）が一致、4組（33.3%）が不一致で、全体の一致、不一致（それぞれ74.4%、25.6%）と比較して、親子の気持ちのずれがやや大きいことがわかる。

以上の結果から、経験した習い事に対して否定的あるいは懐疑的な感じを抱いているケースについてまとめてみよう。

対象数が少ないので断定的なことは言えないが、平均より早い時期から何らかの習い事を始め、平均よりやや多くの習い事に通っていたケースが多い傾向が読み取れる。そして、始める時期が早いにして、遅いにして、子どもの方から言い出すのではなく、主に母親の意向で、つまり親が始めさせた者が多い傾向もみられた。

また、表4-③と表8-③を照合してわかるよう、経験した習い事に対する肯定感が少ないケースで、調査対象全体に比較して親子間の気持ちにずれがあることは注目すべきであろう。

IV 討論

前節の結果から、親の意向で、早くから、多くの習い事をやらせると、子どもは後々、経験した習い事に対して肯定的な印象を持てないことが示唆された。

そこでまず、「早過ぎること」の危険性について考えたいと思うが、このことに関して、エルキンド^(註6)の以下の文章を引用しておこう。

「1930年代に、発達に寄与するのは遺伝か環境かに関してマクグローウが行った有名な実験がある。双子の兄弟のうちの1人ジョニーを、三輪車に乗ることや木に登るなど多種多様な運動課題を訓練した。双子のもう1人のジミーは訓練を受けなかった。ジョニーは自分が訓練を受けた技能面で、すぐにジミーを凌ぐようになった。他方、訓練が中止されてからは、ジミーはたちまちジョニーに追いついた。そして、訓練が始められた年の終わりまでには、双子の運動技能になんら差はなくなった。運動技能の学習では、成熟は少なくとも訓練と同じほど重要だと思われる。

調査が終わった数年後に双子に出会った精神科医が双子を調べた。少年たちの人格、特にその学習方法に著しい違いがあることを発見した。早期訓練を受けたジョニーは、内気で落ち着きがなかった。彼はいつも大人の指示や自分の行動に対する是認を捜し求めているようだった。訓練を受けなかったジミーは全く逆であった。自信と確信に満ちていて、指示や導きを求めて大人の方を向くことなく行動していた、という。幼児の自己志向的な学習に大人が干渉しすぎることの潜在的危険性を例示している。」

以上のようにエルキンドは、いかに小さな子どもであっても、子どもの自由を束縛して様々な訓練をすることが、子どもの自発性の芽生えを矯めてしまうという危険性を警告しているのである。

もちろん筆者は、早く始めたら絶対自発性が芽生えないと言うつもりはない。また、親の意向のみで何かを始めたら自発性が芽生えないと言うつもりもない。ただ、自発性が芽生えないままであると、経験して来たことに対して、また自己に対してさえ否定的になったり、懐疑的になったりする可能性が大きいということになるのではないだろうか。たとえ親の意向で何かを早く始めさせたとしても、進める過程の中で子どもの自発性を芽生えさせ、高めさせるような工夫が必要だと考えられる。

次に、「子ども自身の意志」について考えたい。

子ども自身の意志については、学生、母親とも自由記述の中で多くの者が触れた言葉であるが、子ども自身の意志を尊重するといっても、3歳という年齢は、自分というものを認識し始めて、それを外に向かってやっと表現し始めることのできる年代である。正面切って子どもの意志を確かめるといっても、はっきりと「イヤ」と言う場合以外、そこには母親の意向が反映されていることが多い。ただし、習い事をする中で子どもが少しでも魅力を感じているか、躊躇していないか、緊張しすぎているかなどなどは、ほんの少しの様々な言動にも現れているはずである。母親がのめり込んでいると現実が見えなくなってしまうことが多いものであるが、可能な限り、子どもの内面を読み取ることが大切であろう。Ⅲ-(2)で、親子の気持ちにずれがあり、母親の意向で習い事を始めさせた場合に経験した習い事に対して肯定感が持てなくなる可能性があることを示したが、このことは、子どもの気持ちをくみ取る、尊重する大切さを示唆するものであろう。わが子の発達の状態を知り、わが子の興味関心がどこにあるのか、わが子が何を望んでいるのかを知ることこそが、子どもの一番近くで生活している親の役割といえるのではないだろうか。

前節Ⅲ-(1)-⑤の、やっておけばよかった、あるいは習わせておけばよかった習い事の回答からみて、そもそもその習い事を経験しなかったことによって人生を全く左右してしまうような習い事はなさそうであるし、また早く始めれば始めるほどその効果が倍増し、かつ持続するような習い事もなさそうである。にもかかわらず、親はついつい先回りをして多くの刺激を与え過ぎている、つまり親が習い事を増やしているのが現状なのではないだろうか。

子どもは元来自主的、自発的な存在であり、親が完全に支配することなどできないはずである。

子どもは自分の思うように育つはずだという信念を持った母親とその子どもの悲劇は、例えば『素直な戦士たち』という小説^(註7)にも描かれている通りである。現実の世界でも十分に起こり得る危険性を示唆したフィクションであるが、我々は、わが子のことを一途に思い、子どもを追い込んでしまった母親の姿から、親の押し付けが子どもの成長発達にとって弊害以外の何物でもないことを読み取らねばならないのである。

どの親もわが子のことを思い、子どもにとって良かれと思って教育しようとするのであろうが、あくまでも子どもの成長発達を援助する立場であることを忘れてはならないのである。

ここで、保護者向けのアンケートの最後に「現代社会における幼児教育や早期教育についての感想」を自由に記述してもらうスペースを設けたので、その中の代表的なものをあげてみたい。

「何事も早く、早く教育することがよいような風潮ですが、すべての子どもにとって『早い』ことがよいこととは思われません。ひとりひとりの子どもに合った速度であればよいことであり、子ども自身に負担になるようでは真に『子どものため』とは言えません。子どもには『ゆとり』『余裕』『むだ』が必要だと思います。」

「厳しい受験戦争に備えて幼い頃からの教育も良いと思うが、家庭での3歳までに必要な一般的しつけも同時に行う事が大切だと思います。」

「教育熱心な親が案外幼児の生活習慣に無関心ではないかと思われれます。良い習慣を身につけさせ、しっかり生活させることが大切だと思います。」

「特に知的早期教育は、とすると『片手落ち』という感想を持ちます。野外で自然と遊ぶという事の大切さが見落とされがちだと思います。」

「幼児教育にかぎらず、あまりにも社会とか大人とかが子どもにあふれるように与え過ぎると思う。いじくりまわされて、本格的に飛び込んでいける環境が少なくなっている。」

「最近の子どもは、『親の背を見て子は育つ』時代ではなくなった。世間のいろいろな事件を見て思うのは、習い事も情操教育の為に必要な事だが、もっと幼児期から生命の尊さを教える必要性を痛感する。」

「英語や計算が6歳でできなくても、悲しさ、楽しさ、うれしさがわかる子ども達に育てたい。」

「親から一方的に子どもに数多くの習い事を押し付けるのではなく、子どもの興味、個性をいかしつつ、親も子どもといっしょに楽しみ、ともに成長してゆくのが良いと思う。」などである。

子育てが一段落した段階での感想であり、余裕が感じられる文章が並んでいるといえるだろうが、まさに早期教育の渦中にある母親達も、わが子に対して日々行っていることについてほんの少し振り返る余裕があればと思う。

ところで、自由記述の部分から読み取る限り、学生、母親とも早期教育という言葉に対しては様々な受け止め方があるようである。また現実の世の中では、早期教育という言葉が一人歩きしている側面もあるように思える。

古くからあった稽古事・習い事を始める時期が以前より早くなり、少子化、情報化社会

の中で、いわゆる教育産業の隆盛と育児不安の高まりが相乗効果を持って現れたところに原因がありそうに思われる。何よりも早期教育が何であるかが明確にされないまま、言葉が一人歩きして、世の中の風潮を助長している側面は否めないのではないだろうか。

学問的に明確な定義がなされていないことについて、汐見^(註8)は、学問的検討に値するものとして社会的認知を受けていないことの反映と、現代の早期教育の流行は一過性のものという判断も研究者の間にあると分析した上で、やはり学問的な検討をきちんと試みるべき事柄であると述べている。

母親のためにも、そして何よりも子ども自身が自分で自分自身の人生を構築していくために、早期教育について、さらに子どもの教育全般にわたっての整理された議論が必要不可欠であると思われる。

Ⅲ おわりに

今日、子ども達はかなり早い時期から様々なおけいごととなり習い事に通っているが、人生の早い時期から何かを経験することの意味はどこにあるのだろうか。また、その後の発達にどのような影響を及ぼすのであろうか。これらのことを探るために、本学学生にアンケート調査を行った。

調査結果から明らかになったことは、兄弟や友達の影響から、自分自身で習い事を始めたいと思い、母親の側でも子どもの気持ちを汲み取り、子どもに対する期待や夢もあって、習い事を始めさせることになり、平均、小学生から中学生の間に3種類位の習い事に通っていたこと、これらの習い事を振り返ってみて、親子とも習い事をしてよかったと思い、現在にプラスになっていると感じていること、現代の行き過ぎた早期教育については、多くの者が賛成ではないが、反対であると明確に回答したのは母親よりも学生の方に多いことなどである。

また、かつて経験した習い事に対して否定的あるいは懐疑的な感じを抱いているケースを検討した結果、平均よりも早い時期から、主として母親の意向で、平均よりやや多くの習い事を始めた場合に、後々、習い事をしたことに対して、肯定的な印象を持ってないことが示唆された。

早過ぎることの危険性について、また、子どもの意志や自主性について考察を加え、主体的存在である子どもの成長しようとする芽を摘み取らないことの大切さを強調した。また早期教育という概念については、整理された議論が今後必要であることについてふれた。

- 【註】（註 1）文部省（編） 1994 我が国の文教政策 平成 6 年度 学校教育の新しい展開——生きる力をはぐくむ 大蔵省印刷局
- NHK 世論調査部（編） 1991 現代中学生・高校生の生活と意識 明治図書
- NHK 世論調査部（編） 1991 現代小学生の生活と意識 明治図書
- NHK 世論調査部（編） 1992 現代親と子の生活と意識 明治図書
- など
- （註 2）三重県乳幼児教育センター 1995 子どもの生活実態と子育ての現状に関する調査報告書 三重県乳幼児教育センター
- （註 3）拙稿 1993 子どもの発達と早期教育 高田短期大学紀要 第 11 号 131～144
- （註 4）拙稿 1995 早期教育と子どもの発達——ベビースイミングスクール生および修了生へのアンケートから—— 高田短期大学紀要 第 13 号 1～13
- （註 5）金崎美美子 1986 教師志望学生の「けいこごと」に対する回想調査 日本保育学会 1986 保育学年報 1986 年版 幼児とけいこごと 71～78 フレーベル館
- （註 6）D. エルキンド 1986 正規の学校教育と幼児教育——その本質的な違い D. エルキンド他著 水田聖一訳 1997 早期教育への警鐘 現代アメリカの幼児教育論 創森出版 9～30
- （註 7）城山三郎 1978 素直な戦士たち 新潮社
- （註 8）汐見稔幸 1997 早期教育をめぐる議論 日本保育学会編 わが国における保育の課題と展望 231～242 世界文化社

【参考文献】

- ・安部崇慶 1997 芸道の教育 ナカニシヤ出版
- ・D. エルキンド他著 水田聖一訳 1997 早期教育への警鐘 現代アメリカの幼児教育論 創森出版
- ・日本保育学会 1986 保育学年報 1986 年版 幼児とけいこごと フレーベル館

〈付記〉本調査に協力下さった本学 1 年次学生と保護者の方に感謝いたします。

資料 I

問1 子どもの頃、何か習い事をしていましたか。 はい・いいえ

☆ 問1で「はい」と答えた人に

問2-1 何を習っていましたか。その期間も教えてください。

例： ピアノ 4歳～現在も習っている

_____	_____
_____	_____
_____	_____
_____	_____

問2-2 習い事を始めたきっかけ（もしくは目的）は何ですか。

- a 自分の意志で始めたいと思ったから
- b 兄弟や友達が通っていたから
- c 新しい友達が欲しかったから
- d 親など大人に勧められて
- e その他（ _____ ）

問2-3 習い事をしてよかったと思いますか。 はい・いいえ

その理由

（ _____ ）

問2-4 子どもの頃始めた習い事が今の自分にプラスになっていると思いますか。 はい・いいえ

その理由

（ _____ ）

問3 問1で「いいえ」と答えた人になぜ習い事をしなかったのですか。

- a 習いたかったが親に反対されたため
- b 習い事をしたいと思わなかったため
- c その他（ _____ ）

問4 振り返ってみて、子どもの頃に始めておけばよかったと思う習い事がありますか。あれば、その習い事と理由を書いてください。

_____	_____
_____	_____

問5 早期教育熱の高まりから、現在では、胎児の頃から教育を始める風潮もありますが、このことについてどう思いますか。 賛成・反対・どちらとも言えない

その理由

（ _____ ）

ご苦労様でした。

（ ）組（ ）番

